

(前回よりつづき)

人が天をみて天という名前を贈って、天と申上げているから天があり、地をみて大地というから地があり、萬物をみて萬物というから萬物があり、陰陽とっているから陰陽があるのである。人が名を贈ったから、その名のあるが如く人間が信じているから天地もあり、陰陽もあり、萬物もある。人間が無くなれば言葉もすべて無くなる。物が有る無しに拘わらず、物の名が無くなれば形もなくなる。この故に人間が無くなれば、物も全部無くなるのである。草木に葉が無くなれば、根も枯れるのと同じ理である。

人類の完成と宇宙の完成とがあつて、宇宙人類の榮となる。一本の木でも一本の草でも、月日の光と地の力、即ち天地の力で根から養分を送られ、葉から精分を吸い、植物は成長する。人の目に見えない育成の力を與えて物が生成化育する。これを精神的という。目に見えない、物でないところに神の御働きがある。風が吹くのも、雨が降るのも人間細工ではない。悉く神の御配慮で生成化育するのである。

體的は目に見えるだけであり、耳に聞えるだけであり、個人知識に感ずるだけであるから、これを體的という。たとえ精神的と思つていても個人知識の精神で人間が考え出したものであり、是は體的精神或は知識精神と言う。神の大精神に対して小精神である。

人間は精神的を基礎として、すべてに精神的生活が基礎でなくてはならない。その生活は神の大精神と人間の精神の結びで、宇宙の大精神のもとに精神生活を行い、生成化育の力で精神が更生すれば、自然に宇宙の組織・宇宙生活はすべて人の精神をもつて覚ることが出来るのである。この故に人は宇宙の神の御象に帰

化して、精神的の度量を作り、信念を作り、自覚を得て、神との交流の道を開かねばならないのである。そこで靈の研究によつて神界を知るのである。大空の神秘をきわめることが即ち靈界を知ることになる。これは宇宙の大自然の活動を人間の精神に移し、宇宙の大精神に従つて生活するにある。生活の中に光明・力・徳が起るのである。

大精神即ち宇宙意思から分派された意思があり、宇宙意思と人間の意志とを結んで、精神的・體的の結びが出来て、人に意思の世界が出来るのである。精神的にも體的にも宇宙の循環・順序・秩序を継承して、正しく進む道を人間生活という。宇宙も人類も生命を守るための生活である。この故に宗教家は生命の道を指導するに、宇宙大精神をもつて指導するのである。我等はこの世に生れ、宇宙の御祖(ミオヤ)の高徳をきわめることが大切である。靈性をもつて生れた人間であるから靈即神、神の大精神を受継いで人間は活動しなければならぬ。

人間生活は精神の向上をはかり、物質世界の向上をはかつて宇宙真理の理法で千変萬化に働らき、迷信と邪信とを更生させて善の方向に立帰るにある。神と人と合一して、神人合一の境地を開くならば、何も彼も一切を人の精神に汲入れることが出来る。そして人は宇宙の「たましい」となり、神から分派を得て肉體の魂となる。天神、地人は一体でなくてはならぬ。人は宇宙の組織のもとに生活するのが道である。精神的と體的とを一体として、宇宙の意思を受継いで人間完成の道を進まなければならぬ。

(つづく)